

医師国家試験のあり方に関する研究

研究代表者 高木 康（昭和大学医学部教授）

研究要旨

医師として国民から信頼される医療を実施するには、医療人としてのプロフェッショナリズムを涵養し、十分な知識と技能を修得しており、医療人としての態度を涵養することが前提である。我が国の医師国家試験ではこれら知識、技能および態度のうち、知識についてだけ必修項目、総論、各論から出題される多肢選択肢問題（MCQ）500 題により行われている。一方、参加型臨床実習の student doctor（学生医）となるための共用試験では CBT（computer-based testing）により知識を、OSCE（Objective Structured Clinical Examination）により技能と態度の評価が行われている。この CBT では通常の MCQ だけではなく、後戻りできない機能を設定すること等により、医師として重要な臨床推論能力を評価する問題を作成することも可能である。

本研究では、医師国家試験のあり方として知識を問う筆記試験の有効な手段としての CBT の現状と将来、医師国家試験への導入の可能性について調査研究を行った。すなわち、

諸外国での医師国家試験の筆記試験の実態を調査し、特に CBT 形式での出題形式、作成過程などを明確にする。

CBT 形式の利点と設備を含む問題点を明らかとして、医師国家試験に導入する際のシステムについて提言する。

ことを目的として、

カナダ、韓国、タイの医師国家試験の実態調査（CBT 導入の有無と問題作成、試験実施状況、評価基準の調査、OSCE 導入の有無など）を行った。

医師国家試験における筆記試験への CBT 導入の有効性、特にマルチメディアを活用した CBT の有効性・可能性について討議した。

調査を行ったカナダではすでに CBT を医師国家試験に導入しているが、動画や音声などのマルチメディアの導入は行っていなかった。しかし、我が国の先端的な医学部ではすでにマルチメディアを活用した CBT を行っていることが確認され、これらでは想起・解釈などの知識ばかりでなく、技能評価も可能であることとの意見の一致をみた。また、韓国では現行の CBT を改良し、タブレット PC を利用した SBT（Smart device based test）の導入を検討しており、ネットワークを必要としないこのシステムを利用し、マルチメディア活用とした問題を採用することは医師国家試験の改善には必要であり、今後も検討する価値があるとの結論となった。